近代日本における癒しの系譜と森田療法・内観療法

― 森田療法を中心に ―

北　西　憲　二

Ⅰ．はじめに

森田が彼の名前を冠した精神療法を作り上げたのは，大正８年（1919年），彼が45歳の時であった。森田は明治７年（1874年）の生まれであるから，明治・大正という日本の激動期を青年あるいは医師として過ごした。この時代は一言でいえば，文化間葛藤の時である。西欧文化という圧倒的な力を持った文化が日本に導入され，日本人の生活行動様式を根本から揺さぶった。それは単なる社会的変革のみならず，日本人の世界観にもさまざまな影響を与えた。森田療法の成り立ちとその思想的背景を明確にする作業には，この時代の日本の知識人が経験した西欧文化との関わりとその葛藤への注目が不可欠である。

本論では，森田療法の成り立ちをこのような時代背景との照合作業から検討し，そこで浮かび上がってくる森田療法の基本的な世界観，基本的哲学を明らかにし，それらと東洋における哲学，宗教の関連を検討する。さらにそれらを近代日本における癒しの系譜との関連から検討し，その特徴を明確にすることを目的とする。

Ⅱ．森田療法の成り立ちと西欧の精神療法

１．西欧の精神療法と森田療法

森田療法の具体的な成り立ちや森田の精神療法についての考えは，森田の著作，精神療法講義（1922年）[7]や近藤の論文[4]に詳しい。近藤も指摘するように[4]，森田が独自の精神療法を確立するまでには，その時代にわが国で知られていた欧米の心理的治療技術を，精力的に追試したという歴史を経験している。さてこれらの追試，あるいは欧米の精神医学に対する森田の態度は，決して欧米一辺倒ではなかった。彼が積極的に取り入れようとした治療技術あるいは理論とそれとは逆にむしろ差別化をはかろうとした理論や治療技術がある。ここに森田自身のそして森田療法の世界観を理解する最初の鍵があろう。森田が積極的に追試し，その療法に取り入れたものとして，作業療法，Binswangerの肥胖療法（心身の保養と栄養の補給を目的とし，生活を規則正しく送らせる，生活正規法），安静療法（遮断した環境で安静させる方法で森田療法での臥褥に近いもの）が挙げられる。これらは当時欧米で流布していた神経衰弱の理解に基づいたものであるが，心身の領域に働きかけ，どちらかというと身体療法に近いこと，環境の役割を重んじていることなどがその特徴である。このような発想と治療法は，元来心身一元論者である森田には受け入れやすいものであった。それはドイツ精神医学，中でもKreapelinの記述的，疾病分類的な発想に対する森田自身の態度に顕著に現れている。森田はKreapelinの未見の弟子と称していたという[4]。このようなKraepelinの考え自体は，西欧の精神療法というカテゴリーからす

ると身体療法に近い森田療法の治療技法や世界観には抵触しなかった。さらには素質に基づいた精神の反応様式を重視した森田の理解にKraepelinの考えは大きな影響を与えたものと考えられる。これらの治療技法は，森田独自の世界観のもとで一つの治療体系としてまとめられた。

一方森田が鋭く批判したのは，Freudの精神分析であり，Duboisの説得療法であった[7]。森田は初期の精神分析の概念しか知らなかった。しかし森田が十分な精神分析の知識があったとしても，おそらくその批判的な立場は変わらなかったであろう。筆者が森田は終始一貫して精神分析の批判者であろうと推測した理由は２つある。一つはDuboisの説得療法にも当てはまることだが，ある精神療法が創られ，確立していく過程では，すでに存在している精神療法との差別化が必須となる。それなくしては新しい療法の独自性が主張できないからである。従って森田が自ら創始したと自負する精神療法の独自性を他の療法の批判を強める形で主張することは当然のことである。日本の精神分析の紹介者，丸井と森田の論争は有名であるが，それはこの間の事情を物語る。これは新しいと主張する精神療法一般に関わる事象であるが，もう一つ本質的なことがある。

それは森田自身の世界観に関わることで，おそらく生涯森田はこの考えを捨てることはなかったであろう。森田がFreudの精神分析を批判して次のように述べる。「余は思ふに，人々が身体と精神とを別々に考えて，特に自分の心は自分でのみ初めて知ることが出来，また自分の目的に適ふように之を支配することが出来るといふ風に考えて居る事が，世の中の思想の矛盾を起こす根本でありはしないか。吾人は身体も心も随意に支配することが出来るのは極めて其一部で，わずかに其末梢に止まる。・・・忘却も突然の思付きも，決して吾等の自由に出来ぬ。自然の現象である」[10]（下線筆者）そして抑圧を自然現象であり，心的外傷説も，多くの人が経験することで，それが神経症の原因とはなり得ない。重要なのは素質であると森田は言い切る。つまりそれも自然のものなのである。このように森田は精神分析的心因論や防衛機制を否定する。そして本来自然なその人の反応である過去の不快な追想や欲望を自ら忘れようと排除し，逆に益々それの執着してしまうことが，思想の矛盾であり，それが神経症を作り上げると主張する。ある出来事（心的外傷）を探り，それを意識化することに治療的意味を見出さず，一方では素質に還元し，他方ではその素質の基づいた自己の心身の反応への解釈が神経症の形成に決定的意味を持つというのである。

２．心因論をめぐって

さてもう少しこの森田の精神現象に対する理解を具体的に述べてみよう。ある人が不安（あるいは悩みでもよい）を感じたとする。この不安の理解には少なくとも２通りがあろう。一つは，不安の原因を探ることである。精神分析でいえば，過去の心的外傷にその源を求め，その探索を治療者は行うことになる。

森田はこのような発想を鋭く批判した。森田の提出した理解は因果論に対して，いわば円環論的である[3]。ではどのように理解するのか。ここで具体的に森田のいうとらわれ，悪循環説について説明する。われわれの不安（あるいは感情の反応様式）は，生来の傾向で決まると森田は考えた。問題は，この”自然な”情緒的反応を自己の生存，適応に否定的な反応として決めつけることである。このよ

うな心的態度をもとに，悪循環が形成される。森田が提唱した悪循環とは，注意と感覚の悪循環である。ある情緒的反応に自己の注意が集中するとする。そのためこの情緒が益々鋭く，強く感じられ，更に注意が引きつけられてしまう（精神交互作用）。このような感覚と注意の悪循環から症状が形成され，固着してしまう。この悪循環過程を森田は「とらわれ」と呼んだ[8]。これはこのような情緒的反応が自己の内界で強められ，それしか意識に上らないような閉じられた心の過程である。

このように森田は精神分析の因果論的仮説に対して鋭い批判を向け，現象そのものを観察しようとした。その現象に見出せるある普遍的な法則を見抜こうとした。森田はしかしこれ以上精神現象の認識論に立ち入らなかった。この森田療法の持つ精神現象の認識法を筆者は精神現象に対する円環的理解と呼びたい。これは仏教でいう因と縁という関係性の理解法でもある。仏教ではただ一つの原因ーたとえそれが根本原因であってもーだけで事象は生じないという。その根本原因が具体的に働くためには，別の補助的原因が必ず必要でそれを縁と呼ぶ。つまり事象は因と縁の二つから生じると考える[18]。森田の神経症の形成に関しては，ほぼこの円環的，あるいは因縁的理解に基づいている。これが森田が精神現象を理解しようとした基本的な認識法である。しかしこれは何も東洋的思想の基づく理解であるとはいえない。例えばWeizäckerは心身症の理解において，心身二元論を止揚し，科学的因果論を排除し，心身の相互が原因とも結果ともなる円環的理解を提示した[17]。そこでの重要な概念の一つは悪循環論である。森田も同じように，人間の精神的現象の理解には，感情・思想・欲望などの円環的関連を見出していくことこそが重要であるとした。

そして森田の批判はやはりDubiosの説得療法にも向けられる[7]。Dubiosの思考の誤りから神経症が起こり，合理的説得法と正しい教育法によりこれを根治できるという説を批判し，重要なのは体験であると主張する。Dubiosの説自体が西欧的思考優位あるいは精神優位の二元論にその源を置くことは間違いない。これは現在日本で盛んに導入されている認知療法とDubiosの説は類似している。このことからも森田の精神分析やDubiosの説に対する批判は極めて今日的であるといえよう。

さて森田の円環的，因縁的関係性の理解とともに重要なものは，森田のいう自然論である。身体，感情，欲望のようなわれわれの自然なるものに対して，思想，知識でそれを支配しようとすることが人間の矛盾，葛藤の根本であるとする。つまり藍沢の指摘するように森田は心身の全ての現象を自然に還元する自然存在論的還元というべき立場をとる[1]。そこには自然への全面的な肯定があり，それはまた欲望を含めた人間への楽観的肯定が潜んでいる。精神現象の円環的理解とともに，反主知的，経験主義的，自然還元主義的な認識法が西欧との精神療法の比較から浮かび上がってくる。

Ⅲ．森田療法の世界観

1．心身一元論と無の思想

では森田療法の世界観とはどのようなものであろうか。森田自身は実践を重んじ，思弁の人ではなかったためこのような世界観については断片的に述べているに過ぎない。ここで参照とするのは明治・大正の知識人がどのような西欧の思想を受けとめ，それを日本人

である自己との関連から考えていったか，そこから育まれた思想と森田療法がどのように関連するかである。

中村によれば[9]，明治時代にわが国に西欧哲学が西欧文明の本質的部分として導入されたときに，ある深刻な問いが発せられた。わが国では，東洋や日本の伝統的思想が果たして＜哲学＞に値するものを生み出してきたかどうか，が問題にされたのである。ここでいう西欧の伝統的な哲学の知の前提はロゴス中心主義である。これはあらゆる意味でのロゴスー話された言葉，神知，至高の理性，合理性，人間理性の代表的形態としての意識などーが常に真理の最終の根拠として持ち出されるあり方である。

そして哲学とは，第一に論理的学問の知としての側面，第二に世界観・人生観としての側面があり，西欧の哲学は論理的な学問知として普遍性を獲得した。そしてそのような知のあり方が近代科学を生み出した。それに対して日本や東洋の伝統的思想では，第二の側面への傾斜が著しく，従ってこれらが哲学とよびうるであろうかという問いが発せられたのである。

このような圧倒的な普遍性を獲得した西欧の知は，当時の知識人にさまざまな影響を与える。このような西欧の知に対する答えの一つが，西田の哲学であり，その思想を中村は，唯物論，仏教的な無の思想，自己意識の立場とまとめた[9]。森田がこれら思想界の影響を強く受けていたことはほぼ間違いない。唯物論は心身一元論あるいは精神は身体の作用であるという理解に結びつく。これは，森田が精神と身体の関連を述べた考えとほぼその軌を一にする。森田は線香とそれを振り舞わしたときに火の輪を例えて身体と精神の関係について述べる。動いていない線香を考えれば，これが物質であり，その活動的変化の現象を見ればそれが精神である。しかし線香と火の輪は決して別のものではない。同一のものの静的観と動的観の相違，つまり現象の見方の相違にしか過ぎないという。従って線香が消えれば，精神は消滅する。つまり精神が不滅ではない，また「精神とは，吾人の生活活動其物であって，この活動を除いて吾人は認むべき何物をも持たない」[7]のである。それとともに，このような精神や身体の理解は，当然身体的行為論へと結びついていく。つまり精神への変化をもたらすには，身体的な行為の関与が重要となるという認識である。これが森田療法の臥褥から作業への続く治療システムの一つの理論的根拠となる。

仏教的な無の思想は，森田療法の根本的認識を示す。これは西田のみならず，明治維新後新しい時代の近代的自己の確立をめぐってさまざまな人が激しい葛藤を経験した。例えばその時代の代表的作家であった夏目漱石は，この問題に真正面から取り組み，悩み抜いた人であった。江藤は夏目漱石の目を通して，日本における近代社会と我執の問題について論じている[2]。西欧的小説の手法は西欧的な意味での人間の対立関係や，近代的自我から生まれたものである。従ってその上に存在している西欧的な小説の方法論を，日本に適応しようとすることは，不可能で，それをあえてしようとすると日本の現実を無視して架空の世界を描かなくてはならない。これが漱石の苦悩である。さらに日本人の我執とは，神という存在を前提とする我執とは，その我執を救済するにはどのようなことが必要なのか，という問いでもある。これは優れて現代的問題でもある。漱石は，その救済を結局自然に求めた。そして自然とは，無の表現であり，その中に自己を解消せしめることが

出来る「救い」であると江藤は論じる。さらにつけ加えるならば，それは母なるものにもつながっていく。つまり森田の自然存在論的立場[1]とその底流でつながっていく。

2．東洋的自然論と無我論

1）老荘思想について

では森田の自然存在論的立場とはどのようなものであろうか。その自然論についてさらに検討を加える。この自然論は，決して森田にそして日本に特有なものではない。例えば老子は，人為を捨てたとたんに，自然はその機能を発揮し始めると指摘する。つまり人が生存発展するには，必ず自然に順応し，自然に習わなければならないとする。自然には，人知の及ばない正しい秩序を内包し，それは無私，あるいは無我の状態で出現すると考える[6]。これが森田療法でいう自然に従うこと，「あるがまま」である。従って精神療法の基本に自然と無我論をおくという考えは中国の精神科医の共感と理解を得やすかった。ここでは中国の森田療法家の多くが日本と中国における「自然観」に多くの共有する点があることを指摘している。つまり老荘思想は森田療法の哲学的背景としても極めて重要であることがわかる。この点について中国の哲学者や精神科医の意見を紹介しておこう。

許ら（北京大哲学部）は森田療法と老子「道法自然」の思想の類似性に着目し，論じている。老子は「人間は地を模倣し，地は天を模倣し，天は道を模倣し，道は自然を模倣する」と述べ，人が生存発展するには，必ず自然に順応し，自然に習わなければならないとする。これは森田の説くあるがまま，事実唯真とそのものである。また「なすべきことをなす」とは老子の「無為」即ち「理にそって事を起こす」ことで自然の法則に従って行為するとほぼ同じであるとする[5]。上海の代表的精神科医である王は，森田療法の主旨は，「順応自然」（あるがまま）である。その考えは中国の伝統的な文化や習慣と一致しており，かつ治療法が明白で，筋がはっきりしており，実行しやすいと述べた。そして中国における森田療法は1988年から1993年の間に急速に発展し普及していると指摘した[13]。

2）おのずからなるもの

さてすでに述べてきたように森田療法の基本的な人間理解と治療論の底流には自然論がある。さらにその自然論について検討を加えることにする。

相良亨はこの日本的なものを「おのずから」という概念で捉え直した[14]。従来自然はおもに「おのずからな」・「おのずからに」という形容詞・副詞として用いられてきたものであり，「おのずから」いう意味内容を持つものであるとする。

そして日本における自然という意味内容は，西欧のnatureあるいは今まで論じてきた中国における自然ともやや異なった日本的特徴を持つ。西欧のnatureは，ものごとの本質あるいは本性を意味し，中国のそれは「他者からのはたらきは認められず，それ自身のもとからの変わることのない同一性が保持されている状態」あるいは万物の在りかた，全体の正しい連関，あるべき正しいあり方とされる。これはどちらかというと客観的なものごとの本質を問う理解の仕方である。

「おのずから」とは1）もとからもっているもの。ありのままのもの。2）もとからもっているものの（在り方の）ままに。ひとりでに。自然に。おのずと。という意味である（岩波書店『広辞苑　第四版』）

しかし相良が指摘するように，日本では「おのずから」としての自然を見るときには，

西欧的な自然つまりものごとの本質あるいは中国でいう秩序というような意味内容が含まれていない。ただ「おのずからなる」という自発的な生成の意味を中核としていることに注目すべきであろう。それは知的な解釈でなく，それをそのまま受け取り，それになりきるようなあり方であろう。

そして無私，無我になるとき，「おのずからなるもの」が出現し，みずからの行為が現れてくる。それがわれわれの本来の心であり，自然で固有の生を生きることである。相良は私と無私たらんとする心の対立に日本人のこころの根源的対立と理解した。これは森田の思想の矛盾そのものである。これは明治以来とくに顕著となったこころの葛藤の基本を示している。近代的自己意識が芽生えてくると「私」に執着し，容易に自己を捨てされない時代となった。

近代日本の悩む人の基本がここに示されている。私を意識し，その欲望を意識し，それに執着する明治・大正の知識人たちの多くは鋭く自己のあり方に悩み，その解決を東洋的人間理解と実践に求めたのである。

さて日本思想の基層と関連するこの問題を「おのずから」と「みずから」という鍵概念を駆使して迫ろうとしたのが，竹内整一である[15]。竹内はまず高村光太郎の詩の分析から，“自然の「おのずから」を生きることにおいてこそ，「たった一つの生（いのち）」としての「みずから」を「独り立ちさせ」ることができるのである”と指摘した。そして“日本語では「おのずから」と「みずから」とは，ともに「自（か）ら」であり，そこには「おのずから」成ったことと，「みずから」為したこととが別事ではないという理解がどこかで働いている”と述べている。

さてこの理解は森田療法においてもきわめて重要である。それは精神における「おのずから」なるものを生きることによって，私たちが「みずから」固有の生を生きることが出来るという考え方である。たしかに生命的現象には，われわれが「みずから」主体的に生きると共に，われわれは自然という「おのずから」なるものに生かされているという重要な側面を持つ。これは仏教でいう他力という考えにもつながるものである。それは結局裏腹な現象で，生きると共に生かされるという生命的現象にわれわれの生は規定されている。ここに近代日本における癒しの底流を見出せよう。

これらは竹内が指摘するように日本思想の基層であると共に，私たちの苦悩からの回復，救済において実感することが可能な重要な臨床的出来事でもある。では「みずから」のもつ病理性とそこにおける「おのずから」なるもののあり方などはさらに今後の検討課題であろう。

3．生命論

さて森田療法の持つこのような自然観への理解は当然のことながら，生命論的理解を持つものとなる。鈴木が指摘したように[12]，20世紀初頭には西欧での近代的社会における自然征服観や生存競争の思想，生産力至上主義に対するオルタナティブとして生命論が西欧で主張されるようになった。この哲学や思想の傾向は，日本では欧米より強い影響を与え，大きな渦となった。例えば，明治45年あたりから大正3年にかけて，文芸評論の第一線で活躍していた人々が「生」「生の欲求」「生命力」などをキーワードに一連の評論を書いているという。宗教でもなく，自然科学でもなく，「生命」を世界の原理に据える思想は，いわば人間の思考の第三の極にあたるであろ

う。つまりこのような思想の潮流に森田も決して無縁でなかったことは，次第に森田療法の思想的軸が，ヒポコンリー性基調という体質概念から「生の欲望」という欲望概念へと変化していったことからも伺える。

さて鈴木は生命主義を次のようにまとめている[12]。

1）生命主義は誰にでも実感できる「生命」を存在の根源的，普遍的原理とする。実感と観念が直接，時には無自覚に結びつきやすい傾向がある。

2）生命主義は，勇気と決断と運動を促し，強い実行力を生む。存在の「いま，ここ」の身体的，精神的実感に発し，それを批判し，乗り越えようとする思想の原基として発現する。

3）生命主義は「生命」の自由の発現を求め，創造性に富む。反面，散発的で，無秩序に傾きやすい。

4）生命主義は，要素的還元主義を取らず，全体主義（ホーリズム）に向かう。

5）生命主義の欠陥は，生命主義の内部においてしか解決されない。

さて生命主義の危機において発動する「いまここ」の身体的，精神的実感とそれを乗り越えようとする実践可能性は，森田がこの治療システムを作り上げたときに念頭に置いたものであろう。つまり必死の思いで治療の場に飛び込み，臥褥という遮断的環境下で「いまここ」で感じる生命的実感と跳躍の感覚は，確かに生命論的体験の流れである。このような生命主義は，思想として，また精神療法の実践として多くの可能性を秘めている。そしてこのような生命主義に森田療法の治療原理や治療論が多くの影響を受けている。筆者は，森田の世界観の一つがこの生命主義であると思う。しかしそれゆえ森田療法の治療のシステムと治療理論が限界もあると考えられる。一つはあまりに時には安易に，生命あるいは自然への還元がおこなわれることである。つまり注意を要するのは，森田療法の世界観である生命論に対して理論的検討抜きに，生命論的治療主義を強調する危険性である。「生命」を「いまここ」で実感できるような治療の場が森田療法に必須であるならば，森田療法はその場抜きには成り立たない。そのような場で，人は身体的行為（臥褥も筆者はある種の身体的行為と考えている）を通して直接的に生命的現象を体験する。そこでは言語自体は理論的には軽視されていく。実際問わない，探索しないという不問技法が森田療法の中核的技法となり，これが生命的現象の発露をその場で体験させるとする[11]。しかしそれらの体験が多くの場合一過性であることも多くの森田療法家は知っている。

その体験を深め，不安，恐怖という体験を自己の人生にもう一度織り込んで行くには，単なる生命論を超えたその人のあり方が問われなくてはならない。

Ⅳ．近代日本における癒しの系譜と森田療法

さて森田療法の基層をなす思想として心身一元論，東洋的，日本的自然論，無我論，生命論を取り出した。しかしこれらの思想は森田療法独自なものではない。それらは近代日本における癒しの系譜と深く関わっているのである。これらに関して，田邊，島薗，弓山編集による「癒しを生きた人々―近代知のオルタナティブ」を参考に検討する。

明治後期から昭和前期にかけて，信仰治療を含む広義に医と健康に関するさまざまな癒しが提案され，実践された。この時代とは社会・文化的には資本主義経済による大衆社会

の幕が開き，さまざまな文芸思想が生まれ，一時のデモクラシーの雰囲気に浸りながら，やがてそれらが全てファッショ的な社会・文化統制に飲み込まれていく過程でもあった。そして日本近代化の観点からは，近代化が完結する時期であるが，それらは労資対決の激化，農村の疲弊，根無し草的な都市民の増加，などの行き詰まりも同時にあらわになっていく時代でもある[16]。

このような時代は当然のことながら，今までの伝統的な価値観，あるいは社会体制が大きく変化し，人々の流動性も飛躍的に増え，田舎から都会に移住し，そこで教育を受け，職業につく人たちも増えてきた。そのような時代には人々の不安が高まり，それらは心と身体への不安と結びつき，心の不安としては当時の神経衰弱（神経の衰弱，神経の力を失うこと）という用語の流行として現れてきた。

この時代は，田邊らが指摘するように，さまざまな癒しに関する知と実践が試みられた[16]。例えば，岡田虎次郎は，農業改良運動家としいう合理的な農業法の追及者から山中の修行を経て，善の影響を受けながら独自の正座法を編み出した。桜沢如一は科学による食生活の改善に正面から対抗しつつも，単に伝統的な食養法に回帰することなく，近代科学と伝統的宗教に対する新たな食の体系を提示し，現在の国内外の健康食運動の源流をなしている。野口晴哉も近代医学との齟齬を深めながら，大正期の生命主義の風潮を追い風に，人間の内側に潜む力の開花へと向い，それらは自然治癒力を癒しの原点におくホリスティック医学を先取りするような内容も含んでいた。そしてそれらのいずれもが生きている「いのち」，生の全体性，生活の場といった何らかの生のリアリティに，その知と実践の基礎をおいていた。またそれらは肚，腰，手を媒介としたり，型を通して，多くの人たちにも体感・体得できるものだった。

さて森田療法もこのような動きとほぼ軌を一にしていた。それらの知と実践には心身一元論，自然良能に対する信頼（自然論），そして我執の否定と無我論（狭義の自我から自然に開かれた自己への展開）そしてそれらに連なる生命論が基底に流れている。

それらは単なる東洋的思想への回帰ではない。島薗が指摘するように，森田の考えに大きな影響を与えたのは日本の精神医学の基礎を確立した呉秀三である。呉は精神療法にも興味を持ち，ドイツの精神医学者の論説を紹介し，みずからも「精神療法ニ就テ」という長編の論文を書いている。しかしその基本的な考え方は西欧の精神医学における精神療法である[10]。森田は自分の精神療法に師である呉の考えを一方では組み入れながら，他方では独自の世界観を発展させていった。これが近代日本における癒しの知のあり方とそのまま重なっていくのである。つまり西欧的な医学でもなく，また伝統的な東洋の仏教，哲学などの流れをくむ癒しの方法に回帰するのでもなく，それらを止揚し，第三の道，田邊らが言うオルタナティブを目指したのである。

今までみてきたように，森田療法も近代日本が成立する過程での西欧と東洋の人間理解と苦悩の解決方法のはざまから生まれてきたものである。そしてここで挙げられた岡田，桜沢，野口らの試みと同様に，森田の思想とその実践は合理と非合理，近代と伝統，科学と宗教といった二分法的な枠組みでは捉えきれないものである。またそれらは合理，近代，科学を見据えながら，非合理，伝統，宗教への安易な回帰を拒み，もう一つの道（オルタナティブ）を目指していったといえるだろ

う。

そしてこれらの実践と思想には人間存在を体とこころ，さらには霊のレベルまで含んだ一つの有機体の全体としてとらえ，その全体への回帰を促そうという傾向がまず挙げられる。次いで強調されるのはこれらの個体は彼らを取り巻く環境，あるいは世界，さらにいえば自然との調和が必須のものと考えられている。第三に，下位文化（サブカルチャー）としての側面である。近代的医療や保健から見ても，あるいは伝統的な宗教から見ても，「傍流の」「周辺の」「異端的な」というレッテルを免れない。そして第四に近代への代替性（オルタナティブ）を共通点として挙げられよう[16]。そして本論では触れなかったが，内観療法もこのような近代日本における癒しの系譜に連なるものであろうと考えられる。それらについては今後の検討課題である。

V．おわりにあたって

現代は科学万能の時代である。そこでは合理的な思考が尊ばれ，苦悩することや不安，抑うつなどの不快な感情は注意深く取り除こうとされる。そして悩む人たちに対してさまざまな精神医学からの病名がつけられ，それらはまた薬物療法の対象とされる。つまり苦悩の医療化が起こってきたのである。

しかしこのようなことからわれわれの生きるに当っての苦悩が解説されたわけでない。むしろそれらの苦悩はわれわれの人生から切り離そうとすればするほど逆にその力を増していくようである。

このような時代的背景からもこれらの近代日本における癒しの系譜はまた現代に再び脚光をあびようとしている。

文　献

1）藍沢鎮雄：『日本文化と精神構造』太陽出版，東京（1975）

2）江藤淳：『夏目漱石』新潮社，東京（1979）

3）北西憲二：『我執の病理』白揚社，東京（2001）

4）近藤喬一：「森田療法の発見」精神療法15（3）：218－226

5）許抗生，王建華：「森田心理療法と老子。「道法自然」の思想」メンタルヘルス岡本記念財団研究助成報告集　1990。3；287～292。（1991）

6）森三樹三郎：『老子・荘子』講談社，東京（1994）

7）森田正馬：『精神療法講義』森田正馬全集，高良武久，他（編），第1巻，pp509－638，白揚社，東京（1922／1974）

8）森田正馬：『神経衰弱及強迫観念の根治法』森田正馬全集，高良武久，他（編），第2巻，pp71－282，白揚社，東京（1926／1974）

9）中村雄二郎：『西田哲学』中村雄二郎著作集Ⅶ，岩波書店，東京（1993）

10）島薗進：『＜癒す知＞の系譜』吉川弘文館。東京（2003）

11）大原健士郎，藍沢鎮雄，岩井寛：『森田療法』文光堂，東京（1970）

12）鈴木貞美：『「生命」で読む日本近代』NHKブックス，東京（1996）

13）王祖承：「中国における精神療法の歴史と現状－特に森田療法について－」森田療法学会誌，6：37－41。1995年

14）相良亨：『日本の思想』ぺりかん社，東京，（1989）。

15）竹内整一：『「おのずから」と「みずから」。日本思想の基層』春秋社，（2004）。

16）田邊信太郎，島薗進，弓山達也：『終章

癒』田邊信太郎，島薗進，弓山達也編。癒しを生きた人々。専修大学出版，東京（1999）
17）Weizsäcker. V. v:Studien zur Pathogenese. Schriftenreihe zur Deutschen Medizinishen Wochenschirift, H. 2, Thieme, Leipzig（1935）－木村敏，大原貢（訳）：『病因論研究』講談社，東京（1994）
18）横山紘一：『唯識とは何か』春秋社，東京（1986）

参考文献

森田療法に関しては，以下の文献を参照のこと。

1．北西憲二：『実践森田療法』講談社健康ライブラリー，東京（1998）
2．北西憲二，中村敬編：『森田療法』ミネルヴァ書房，京都（2005）

―― きたにし　けんじ ――
国内研修：日本女子大学人間社会学部
社会福祉学科教授
指 導 者：東京大学大学院人文社会系研究科
島薗　進教授